

学部・研究室
レポート大学の学部・研究室の
「今」を紹介します

背景を知れば数倍楽しい！ 古代の生活に根付いた万葉集への親しみ方

奈良大学 文学部 国文学科 教授

上野 誠さん

現存する最も古い和歌集として知られる万葉集。その研究で知られる、奈良大学の 上野誠先生は、一見難しく思われがちな古代の文学を、当時の文化や生活と重ね合わせることで、興味深く紹介されています。今回は、そんな上野先生に、万葉集の面白さや先生の研究について、さまざまなお話を伺いました。



学外授業

ゼミでの1コマ、
座卓では発表を中心に進められる。



誰が、どこで、どう詠んだのか
まずは万葉人の生活を知る

先生が専門にされている「万葉文化論」というのは、どういう研究なのでしょうか。

歌というものを、文字として研究するとします。すると人の考え方や思いの表現の仕方を研究することが主流になります。一方で、歌というものにはその時代を反映するという側面があります。時代と、それを背景とするものを見方や、考え方を反映しています。つまり、万葉集の歌というものは、奈良時代の社会や文化と無関係ではないのです。当時の人が、これらを生み出していった背景が必ずあるはずで、

歌を通じて、当時の人がどのように生活をし、また、どのようなものか考え方をしていたのかを学ぶ。それが、「万葉文化論」だと思ってください。

当時、律令という法律に基づいて役所ができており、そこで働く人を律令官人といいます。この律令官人はよく地方へ赴任しました。そうすると、「都へ帰りたい」という歌を、しきりに詠むわけです。彼らは、平東京に家族を残して赴任しますから、家族に対する強い思いがある。単に、「都が恋

しい」ということ以上に、官人の生活そのものが、望郷の歌の契機になっているという事実があります。

そんな歌の代表と言えるのが、あをによし

奈良の都は

咲く花の

薫ふがごとく

今さかりなり

という有名な歌です。「奈良の都はとも栄えていて素晴らしい」という内容でありますが、この歌は実は、奈良で詠まれた歌ではないのです。もともは平城京の役人だった小野老という人が、赴任先の九州の大宰府から奈良を思って詠んだ歌なのです。文字面だけを追ってしまえば、単に平城京を褒め称えている歌ですが、下敷きにある役人の生活を理解し、詠まれた時の気持ちや推し量ると、解釈が違ってきます。そこで初めて、歌の真髄に触れることができるのです。

もつとわかりやすく言います。あんパンやカレーパンを想像してください。文学作品の中に、これらが出てきたとします。書かれたのが、明治時代であれば、かなりの高級品としての描写です。でも、平成の世であれば、とても庶民的なものとして描かれてい

ます。価値が違いますから。つまり、当時の生活を知らなければ、出てくるものの価値も、そこに込められる思いや意図もわからなくなるのです。

文学も、文化のひとつなのです。だから、万葉集が、どんな文化や生活の中で生まれたのかということは、大きな要素なのです。それが、私の言うところの「万葉文化論」。詠まれた時の思いに近づくためには、その時の土壌を知らなければならぬのです。

文化を研究していて、歌の解釈が変わってくることは多いのですか。

ひとつ考古学的な発見があると、それまでの定説が覆されることも多々あります。研究状況が、予想だにしていなかった方向へ進むこともあります。

例えば、最近問題になったことを挙げると、万葉集にあるものと同一の句が記された木簡が、他の木簡と共に出土してきたことがありました。そうすると、その木簡は何のために使われていたのか、ということを考えずにはいられないくなります。こんなのはいくらの上だけの研究じゃ追いつかないことです。考古資料をもとにして考えなくては、従来の解釈だけの研究では、見えてこない部分です。

なぜ木簡に歌が記されたのか、木簡の大きさや書き方も、気になるところです。書き方といえは、この木簡の場合、漢文ではなくて文字は「文字一音で記されているのです。どういふことか」といふと、「カワノ」と書かれていたら読み間違えることはないけれど、「河野」と書かれていたら、「カワノ」か「コウノ」かわからないでしょう。つまり、この木簡に書かれたものは、誰が読んでも間違えないように、すなわち、みんなで声に出して、音読することを前提に書かれているのです。

そんな木簡が宮中から出てくるといふことは、歌は、宮中でみんなで詠む詠う、ものだったということがわかりますね。さらに、それを書き留めて持ち帰った人がいるかもしれない。この木簡には、そんな可能性もあります。そういう風に考えると、歌の扱われ方詠われ方が、よく見えてきます。

背景や状況を

知ってこそわかる面白さ

万葉集の面白さを感じられる歌を、何か教えていただけますか。

宴会の中で突然、さいころの目について詠ってください、と言われたらどう

うでしょう。そう言われた時に、長足寸意吉麻呂という人は、

一、二の目

のみにあらず

五六三

四さへありけり

すころくの采

と詠いました。「一、二の目だけではありません。五、六、三、四、という数字までありますよ、すころくの目には」と詠んだわけですが、「なんだ、その程度なら誰にでも詠める」と言ってしまうことなくところが、みんなが「どう詠ったらいいだろう」と考えている時に、涼しい顔で数字だけを並べてみせた。そこにオチがあるわけです。宴の歌ならではの面白さですね。

もうひとつ、面白いものがあります。山上徳良の有名な歌に、

憶良らは

今はまからむ

子泣くらむ

それその母も

吾を待つらむそ

というものがあります。意味するところは、「憶良めは、もうおいとまいたします。我が家では私の帰りを待ちわびて子どもが泣いているでしょう。その母である妻も、私の帰りを待ちわび

学外授業

万葉集の舞台を実際に訪れ、歌の背景を考えます。



石舞台古墳



雷丘にて、連踏の位置関係を確認



伝馬鳥板置宮

ているはずですから」というもの。この日、大宰府では、官人が集まったの大宴会が催されていたのです。この歌は、その宴を中座する際に詠まれた歌でした。

ところがここで、興味深い事実があります。この時、憶良は、すでに70歳を過ぎていました。ということは、親の帰りを待って泣いているような幼い子どもや、夫を待ちわびている若い愛人がいたかというところ……確率はかなり低そうですね。つまり、この歌は、無粋にも宴会を中座してしまうので、ひとつ、歌という形で笑いのネタをつ

奈良大学 文学部 国文学科
教授・上野 誠 さん

くり、場を和ませて退場しよう、というものである可能性が高い。そう考えると、その場の情景が目につかびませんか。そして、歌は、そんなコミュニケーションツールとして、社会的なアイテムとして、とてもうまく使われていたことが見えてくるのです。

文字を知らない人にも
大切だった「歌」

歌というのは、随分頻りに詠われていたものですね。

万葉集に詠われている歌は、律令国家の縮図です。平安時代よりも、もっとずっと、広い階級・立場の人たちのものでした。文字を知らない人の歌も、伝わって残っています。

そして、歌はとても頻りに詠われていたはずなのです。個人が「歌を交換する」ということの持つ役割は大きかった。なぜなら、節をつけて型に合わせ、歌にすれば、覚えやすいでしょう。感動も気持ちも、メッセージとして、第三者、使者の口を通じて、間違えずにわかりやすく伝えることができま

す。それが、文字の普及とともに、役割は小さくなっていったと思われ

本物に触れることで
考える契機が作れる

子どもや学生が万葉集に親しむきっかけとして、お勧めがありますか。

時間をかけて本物を見ることが大切だと思っています。本物というのは、「今ある解釈が、どうやって成り立ってきたのか」を考えさせることですね。その解釈が、どれだけ厳密な裏づけによってなされてきたのか、悪戦苦闘をしてきたのかなどを。しかしながら、発見によって一夜にして解釈は変わる。それを見せられればと。

今の子どもには、物事を考える余裕がないですね。なにか、積み込まれた知識の残留度を測ることばかりに終始しているような感があります。東洋の古典教育というのは、そうではなかったんですよ。自ら思索にふけり、友と語ることが大切だと、論語にもあるでしょう。物事を考える契機を作ることが大切なのです。

もしも、お子さんに何か、というならば、わかるわからないは別にして、本物に触らせることですね。小さい時から、神社や歌碑などを見ていれば、印象に残ることもあるし、何かのきっかけでふと思いつくこともあり

ふとしたきっかけで興味を抱けるような、そんなきっかけを作っておいてはいかがでしょうか。



プロフィール

1960年、福岡県出身。文学博士。

國學院大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学。大正大学や武蔵野女子大学などでの非常勤講師を経て、現在は、奈良大学にて教鞭を執る。

専門分野・研究テーマは、万葉文化論、および万葉挽歌の史的・芸能伝承論。

著書は、『古代日本の文芸空間 - 万葉挽歌と葬送儀礼』（雄山閣出版）、『万葉びとの生活空間 歌・庭園・暮らし』（塙書房）ほか多数。『魂の古代学 問いつづける折口信夫』（新潮社）が、平成21年度（第7回）角川財団学芸賞を受賞。

先生からの Message

本物の前に立ち、感じ、考えてみる。そんな経験をたくさんしてください。